

白鵬 33 回目の優勝を達成
浮かれてばかりはいられない相撲界

< 1 > 遂に達成 33 回目の優勝

白鵬が 33 回目の優勝を達成して、遂に大横綱大鵬の優勝回数を越えた。予想をしてはいたものの、終わって見るとさすがと言わずにはいられない。15 日間の相撲を見ていくつかの変化を感じた。

場所が始まったばかりの頃には落ち着いた取り口が感じられたが、日を追うにつれて垣間見ることができた「相手に攻め込まれて一瞬ハッとするような場面」、しかし「素早い身のこなしで繰り出す次の手、また次の手」、時には「やや乱暴と思えるような荒っぽい攻め」。

相手に充分に取らせてから自分の型に持って行く「受けて立って勝てる相撲」を試しているようにも見えたが、「どうしても今場所の優勝を勝ち取らねばならぬ」との強い思いが焦りを読んでいたのかとも読みとることができた。本当の所は本人にしかわからない。

仕切りの最中から相手の動きに視線を合わせて目を離さない「獲物を狙う肉食獣のような目」、立ち合いの第一歩めの深い踏み出し、その時に低く割れた腰、見事な摺り足で運ぶ二歩目・三歩目、これでは良い位置のまわしを取れるに決まっているし、よしんば攻められることがあっても十分に反撃の余地を残している。他の追従を許さない相撲の裏にはこんな必然性が存在している。

優勝回数 33、うち全勝優勝 10 回、通算成績 895 勝 186 敗 21 休、うち幕内成績 801 勝 138 敗 21 休。

これほどの力士にもかかわらず、序の口・序二段・三段目・幕下では一度も優勝していないのも面白い。間もなく 30 歳という若さでここまで達成、これから人間としての磨きもかかり、勝ち星もさらに伸びて行くと思っている。通算成績 1045 勝 437 敗 144 休・優勝 31 回の千代の富士に国民栄誉賞を贈った「ある国のお偉い方々」は、この先さぞお悩みになることだろう。

< 2 > 「物言い」の制度と精度

13 日目、白鵬の優勝が確定する可能性がある大事な取り組みで大問題が起きてしまった。

この日の対戦相手は稀勢の里、動きの速い相撲でしかも土俵際でもつれたため白鵬に軍配が上がりはしたが「物言い」となった。そして審判の土俵上での協議の結果「取り直し」となった。取り直しの一番では白鵬が圧倒的な強みを見せて文句なしの勝ち名乗り受けることになった。取組直後のスローモーションビデオを見ると稀勢の里の手の方が先に着地しており、「取り直し」の裁定は誤りだった。国技館の観客から見れば、物言いがつこうがつくまいが過ぎてしまった動きについては何もわからず「物言い」「取り直し」「勝ち名乗り」しか印象に残らないが、この間テレビ放送で流れるスローモーションビデオによってテレビ観客には事件の一部始終がわかってしまう。取り直しの取り組みで白鵬が鋭い勢いとメリハリのある勝利を示したのは「この裁定への怒り」だったのかもしれない。





白鵬（手前）の寄り身をこらえて
稀勢の里の捨て身の小手投げ
まだ二人とも着地していない



稀勢の里（向こう側）の左手は着地しているが、白鵬の右手はまだ宙に浮いている
物言いがついて取り直しになった

千秋楽にもう一件疑惑の勝負が発生した。すでに関脇からの陥落が決まってしまった碧山と、この勝負に勝てば三役復帰の可能性が高まる隠岐の海との対戦。土俵際に攻め込む隠岐の海と俵を背にして突き落としでかわそうとする碧山。軍配は隠岐の海に上がり、物言いもなく片付いてしまったが、スローモーションビデオが示す画像はそうではなかった。寄り身をこらえながら突き落としを見せる碧山の左足と、寄りながら突き落としを食ってしまった隠岐の海の右手がほぼ同時に着地している。これは間違いなく「物言い」とすべきところだが、至近距離にいる浅香山審判はそこに視線を送ってはいるものの手を上げていない。おまけに、この間を細かくコマ送りして見ると隠岐の海の右手の方がやや早めに着地しているのがわかる。

	
<p>隠岐の海（手前） 碧山（向こう側） 両力士とも宙に浮いている 隠岐の海の右手の方が土俵面に近い 隠岐の海の体はもう生きていない</p>	<p>隠岐の海の右手が僅かに早く俵に触れて 一瞬おいて碧山の左足が着地 浅香山審判の目の前、左の立川審判も凝視しているが二人とも物言いをつけず</p>

この一番で隠岐の海が敗れると、来場所の三役の座を埋める力士がいなくなってしまうという大事な勝負だけに、多くの人に疑問だけでなく疑惑まで与える恐れがある勝負だった。

「物言い」がついてから参考情報としてビデオ画像による検証が行われているのが現状だが、勝負と同時進行でモニタールームが画像解析を行い、ビデオモニタールームからでも「物言い」が付けられるようにすべきではないかと感じた二番だった。

後日譚ではあるが、初場所が終わったある日、マスコミの取材に応えた白鵬がこのことについて発言したようで、それが物議をかもしているそうだ。

< 3 > 大関って何だ？

大関三人で 28 勝 17 敗（勝率 0.622）とは何とも情けない成績ではないか。稀勢の里の 11 勝 4 敗は何とか評価できるとして、残りの二人は「勝ち越してカド番を脱した」としてニュースになる始末。

今場所の稀勢の里は、常に相手を正面に置いて落ち着いてさばく相撲が取れていた。腰が高いのは欠点ではあるが即座に改善できるような問題ではないので目をつむむとして、高いながらもやや腰を落とし気味にして鶏を追うような動きができており、随分意識して相撲を取るようになったなと感じられるほどであった。あと星ひとつふたつの改善が課題になる訳で、周囲がやれ優勝だやれ横綱だと騒ぎたてるよりも、じっくり見てやる方が良く見ている。

三人の大関の成績を「対戦相手の地位別に分析」して見ると下表のようになった。それぞれの大関の実力のレベルと課題が見えるような気がする。琴奨菊は 9 勝 6 敗、豪栄道は 8 勝 7 敗と辛うじて勝ち越しができて大関の地位から陥落せずに済んだ程度のできて、決して立派な大関としての成績ではない。

この二人が来場所横綱と優勝を争って準優勝に値するような成績を残すと、周囲はすかさず「綱取り」と言っ騒ぎ立てるに違いない。冷静にデータを眺めて物ごとを決して戴きたいと思うばかりである。

	横綱との対戦	大関同士の対戦	関脇小結との対戦	平幕との対戦	備考
稀勢の里	1 勝 2 敗	1 勝 1 敗	3 勝 0 敗	6 勝 1 敗	
琴奨菊	1 勝 2 敗	1 勝 1 敗	2 勝 2 敗	5 勝 1 敗	
豪栄道	0 勝 3 敗	1 勝 1 敗	3 勝 1 敗	4 勝 2 敗	

< 4 > 関脇小結は全員討ち死に

関脇二人と小結二人が負け越し、総入れ替えが必要になった。どの力士もこの地位に留まることができる力を持ってはいないので、いずれこうなるだろうと予想はしていた。

碧山の棒立ち前かがみで力まかせの相撲がそんなに通じるとは思えないし、相撲の基本が染み込んでいないまま上位に進出してしまった逸ノ城がそんなに良い成績を続けられるとは思えないので、私見としてはあまり驚いてはいない。

小結の栃煌山は「大関に一番近い力士」と騒がれることが多いが、両差しにならないと何事もできず、コロコロパタパタ転がされるような状態が改善できていないのに騒ぎだけが先行している感じがする。先場所の出来映えからするとそろそろ殻が破れたかと期待した高安も全く相撲が取れていなかった。

そんなこんなで関脇小結全員討ち死にのところへ、豪栄道が8勝7敗で大関の地位を守ってしまったし、平幕上位に勝ち越した力士が少なかったので、関脇小結への昇進は大盤振る舞いをしなければならない状態になってしまった。

関脇・小結の地位に定着する力士が出てくれば、「次の世代を担う力士」として期待できるが、毎場所入れ替わっている状態だと、まだまだ将来展望は暗いと言わざるを得ない。まだまだ当分はこのような状態が続く「群雄割拠なき戦国時代」と見ている。

< 5 > 若手力士の台頭 しかし・・・

逸ノ城・遠藤・照ノ富士と注目を浴びる力士が続々と登場してきた。ついこの間までは松鳳山・勢・高安らが、さらに遡れば妙義龍・隠岐の海らが注目を浴びた時期があったが、時代の波は好むと好まざるとに関わらず押し寄せて来る。驚かなければならないのは栃煌山ばかりではない。

逸ノ城の相撲は、立ち合いの鋭い攻めがなく腰高で棒立ち、相手を捕まえて体の大きさと力とで封じ込める相撲が目立ち、新入幕のころからさほどの期待はしていなかった。予想にたがわずその相撲の型はほぼ覚えられてしまい、「巨体で豪快な相撲」と言う称賛の声は場所毎に減ってきている。壁に跳ね返された今場所、ここを起点にしてどう変わるかが今後の相撲人生の鍵になるだろう。

遠藤は高い壁に阻まれて長い遠回りの道を歩んでいる。白鵬と同じように立ち合いの一步目の深さと膝が良く曲がった腰の低さが武器で、目下少しずつ壁を打ち破りつつあるように見える。立ち合いの攻め道具の一つとして突き押しもあり、低い位置からの前まわし取りもあり、今場所の相撲の中にもそれをうかがわせるものがあつたので期待できる状況にある。近いうちに何か成果を見せてくれそうな気がしている。

照ノ富士は受けて立ち、守りに入ると腰が重いのでかなり持ちこたえられることが多い。攻めに入ると粘り強くしかもとっさの荒技を繰り出してくることもある。そんなことから稀勢の里など大物食いをしたり、横綱に対して善戦したり、逸ノ城と水入りの大相撲を展開したり観客に強い印象を与える相撲を見せてくれ、この数場所で力をつけてきたと感じさせる力士の一人にあげられる。深い位置のまわしを取って力づくの相撲を取ったり、差されるとかんぬきに決めたり、下がりながら大技を繰り出したりの力技だけでは限界がある。腰の重さと腕力（かいなぢから）を活かしていくのなら、立ち合いで腰を低くして鋭い突っ込みをして前みつを取って前へ突き進む相撲を覚えたら、三役定着も夢ではないばかりかその上への期待もできる。成長しながら昇進していくか、怪我をして下がって行くか、いずれへ向かっていくのか、数場所の動きを注視したい。

< 6 > 立ち合いの乱れ

度重なる大怪我で幕下まで下がった豊真将が引退を決意した。回復が難しい状況になってきたと思われる。きれいに足を上げた四股、両手をきちんとついた仕切りと立ち合い、勝負が終わり土俵を下りる前の礼儀などなど、この力士への評価は高い。けれん相撲は一番もなく、叩きや引きはせず、どの取り組みもの真摯に取り組んで全力を尽くして戦う。まさに「力士の鏡」と言うべき存在だった。私が気にしている力士のひとり、まずもって残念でならない。

今場所の土俵を見ても、乱れた立ち合い、それを何ともしない行司と審判、目を追って乱れが広がっている

ように見えてならない。いつの日からか手をつかない立ち合いが許されるようになってから今日まで乱れの幅はどんどん広がっている。

自分の都合だけで仕切りを重ねて、自分の都合だけで相手に突っかける琴勇輝は突っかけた後で深々と審判長に頭を下げて「礼儀正しい力士」を装う。中腰になったままなかなか手を下さない千代鳳、なかなか手を下さないばかりか腰をゆら付かせて相手を惑わせる栃煌山、などなどルール違反が数多く存在する。

北太樹、妙義龍、豊ノ島などの規則通りでしかも所作がきれいな力士達が貧乏籤を引くことがないように、新しい規則の導入なども視野に置いて、大胆な改革に着手すべき時期に来ていると思う。

豊真将の引退を機に、一言発して見ることにした。

以上